

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	スピリチュアルケアとしてアイリッシュハーブ演奏を試みた 1 例
演者名	大塚 真美
所属	医療法人ゆうの森 たんぼぼクリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告      2. 症例シリーズ報告      3. コホート研究 4. 症例対照研究    5. 調査研究      6. 介入研究      7. 二次研究 8. 質的研究      9. その他研究	NO.
		1
<p>目的</p> <p>ハーブによる音楽は、紀元前から癒しの「薬」として用いられている。一人の病人のベッドサイドで、その人のその時の状態に合わせた音楽を奏で、治療や回復をめざすものではなく、ハーブとともに患者さんに寄り添うことができる。今回、進行胃癌終末期患者のベッドサイドでアイリッシュハーブを演奏しスピリチュアルケアを行った症例を報告する。</p> <p>方法</p> <p>症例は 70 歳代男性</p> <p>【既往歴】糖尿病(インスリン療法)</p> <p>【現病歴】1 年前から黒色便が出現、徐々に食事摂取量の減少あり、X 年 Y 月近医受診した。精査にて 3 型進行癌 stage4(多発肝転移、リンパ節転移、両側副腎転移)と診断された。外科的治療の適応はなく化学療法を勧められたが、在宅緩和医療を希望し X 年 Y+1 月から当院の訪問診療を開始した。</p> <p>【治療内容】初回訪問時、貼付薬(フェントス 1 mg→最終 22 mgまで増量)、内服薬(オキノーム、リンデロン、ワイパックス)</p> <p>【経過】元来の性格が非常に頑固であり、在宅導入当初は自己判断でインスリン量増量や内服薬の拒薬をすることが多くみられた。身体的疼痛が改善しても何か理由をつけては不平不満を言い、時に怒りの感情をぶつけてくることもあった。一見我儘ともとれる行動にスピリチュアルペインの関与を考え、ベッドサイドでアイリッシュハーブ演奏を試みた。演奏前は非常にイライラし攻撃的であったが、徐々に落ち着きがみられた。「こんなことまでしてくれるのですか、ありがとう。気持ちが落ち着きました」と嗚咽し、落ち着くまで傍にいと、「どうやって逝くのでしょうか」と話された。その後は穏やかな表情で過ごすことが増え、週 1-2 回診療時に柔らかな表情で眠りに着くまで演奏した。</p> <p>考察</p> <p>患者の痛みを想像し、寄り添い・支えるためには何ができるのか考え、拙い演奏ではあったが、ハーブの音色が癒しを与え、迎える死に向き合うことができたのではないかと考える。</p>		